

緑の風

MIDORI NO KAZE

E-mail ● famajitiken1972@space.ocn.ne.jp
URL ● <http://www.famaken.org/>

2月号

vol. 249

2021年1月31日

●編集

NPO法人

多摩住民自治研究所

日野市神明3-10-5

エスプリ日野103 〒191-0016

TEL : 042-586-7651

FAX : 042-514-8096



新年の朝焼け 2021年1月(撮影:編集部)

- 【新年のご挨拶】荒井文昭 (NPO法人多摩住民自治研究所理事長・首都大学東京教授)
人権保障を土台にすえた
地方自治の発展を実現させていくために
- 【特別寄稿】本田浩邦 (獨協大学教授)
「ベーシックインカムがなぜ注目されるのか
——経済社会、所得分配のあり方を問い直す」
- 【タマの風 vol.92】神子島 健 (東京工科大学准教授)
3・11から十年② 安全神話の足音

シリーズ
多摩が動く

「一橋大学アウティング事件」について (前編)

事件とその後のとりくみを聞く
二〇二〇年二月実施 聞き手●緑の風編集部

(LGBTQ+ Bridge Network) 本田恒平

編集部 本日は「一橋大学アウティング事件」について、「LGBTQ+ Bridge Network」の代表である本田恒平さんにインタビューをさせていただけます。よろしくお願ひ致します。
まずは緑の風の読者向けに、「一橋大学アウティング事件」とは何か、解説をお願いいたします。

一橋大学アウティング事件とは

本田さん (以降敬称略) 簡単に説明すると、まず事件が起こったのは二〇一五年の八月二四日に一橋大学のロースクールの当時二五歳の学生が亡くなりました。結果的にはその学生はゲイ男性だったということが分かるんですが、それが報道されたのは二〇一六年です。

この時にニュースで取り上げられ、二〇一五年におきた一橋大学における自死事件がLGBTの問題であると明らかになったのは事件から一年後だったということです。
亡くなる以前の経緯としては、二〇一五年の

事件のLGBTの問題に関しては示談が成立していますけれども、LGBT問わずすべての学生に関係しているところが非常に残念な結果になってしまったのが今回の経緯です。

編集部 事件の話をインタビュー前に調べまして、一般論的になってしまっていますが、人の感情を受け止めるという事はすごく重いものだと思います。これはセクシュアリティに関係なく、私が大学で先輩に告白して、それをSNSで暴露され、相談室に持ちかけたところのような対応をされた場合、傷つきますし、大人と子供が混在している研究機関であり教育機関である大学には、安心して相談できる場所が必要ですよね。

本田 では告白をした二人の問題が何故これほどの問題になったかという点、男女間の問題ではさほどこのような暴露はされないんですよ、そこで何故ゲイだと黙っていられないとなくなったかという点、そこにホモフォビアの意識があるからではないかと、一般的には捉えます。これは異性愛の現場では起こりえないことであり、今回のアウティング事件での、同性愛特有の問題の一つです。

そういった問題が起こりうる大学における、差別と言うかLGBTの人に対する恐怖観念が横たわっている中で、気持ちよく学校生活を営むことができない、ないしは相談することができないというのには、そこに大学において責任がないのか、あるいは他にサービスで改善させる

四月にゲイの学生が想いを寄せていたロースクール先輩の方に告白をして、それが結局受け入れられなかったんですが、そのまま友達関係を続けていこうと相手に言われ、そのまま関係が続いていたけれど、結局告白された相手学生は、告白したA君がゲイであるということを知っていられないと、七人八人居るグループのLINEで暴露しました。それがセクシユアルハラスメントであると思ったA君は一橋大学ハラスメント相談室という所に行きますが、そこでも「あなたのセクシヤリティを変えればいいんじゃないですか」とか性同一性障害の精神クリニックを紹介されてしまったという結果でした。そのハラスメント相談室では相手からの謝罪を要求しに行ったわけですが、要求の結果そのような対応されてしまって、ひどく傷ついたわけです。

彼自身は家族にも親しい仲にすらカミングアウトしておらず、セーフティネットのようなものは実質ありませんでした。大学に相談したけれども結局そういう扱いされてしまって、八月二四日に身を投げたというのが事の経緯です。

ことができなかつた、また今後は改善できないのかと言うと、全くそうではないわけです。

今回、相談室は本当に酷い対応したのですが、今後改善させていくかについて裁判での和解交渉が行われたんですけども、「改善していくつもりはない」との判断で、和解交渉が決裂しました。これは本当に由々しき問題で、少なくとも大学で一人亡くなっていることに対して、100%でも責任があれば改善していきますとならず、こういう世間の潮流にもかかわらずそれを否定するというのは社会的責務とは何なのかと考えさせられます。大学生が自分の大学で気持ちよく生活できないというのは、大学の安全配慮義務外なのかって言うのと全くそうではないと考えます。

編集部 今回の事件の賠償を認めるかどうかの話ではなく、未来に対しての責任を担うつもりがないのは悲しい回答ですね。

本田 そうですね。しかもこれが判決として残ってしまうのが大きいと思います。法廷戦術の話にもなりますが、和解交渉が決裂した時点で、敗訴を迎えるよりも、もう訴訟を下ろした方がいいのではないかと議論も内輪で起こりました。というのも国立大学を舞台にした訴訟でその判例が残ってしまうと、今後大学でそういった事件が起こった時に判例が後世に影響してしまいう可能性は多分にあつて、前例を残してしまう、LGBTの問題ではあるけれども、

そこから一年後にニュースで取り上げられて、そこから民事裁判が始まりました。大学を相手取った国立大学法人(国)に対する損害賠償請求と、アウティングした学生本人を相手にした訴訟二つが並行して行われていましたが、学生に対するプライバシーの権利を侵害していたのではないかとこの裁判は地裁で示談が成立しました。ただ、問題だったのは大学の方です。

国立大学法人(国)に対する損害賠償請求で勝ち目はほとんど有りませんでした。地裁で敗訴して先日(二〇二〇年一月二五日)高裁も敗訴してしまいました。学生に対してアウティングの責任についてでしたが、大学に対しては安全配慮義務を怠っていたのではないかとという争点で戦っていましたが、大学のそういった責務はない、人知の至る所ではなかった。という回答が判決として出てしまったのが、今回のアウティング事件だったわけです。

学生本人との訴訟に関してはLGBTの問題であり、アウティングというのもセクシヤリティについて特に問題視されることでLGBTの問題ですが、大学の安全配慮義務に関してはLGBTは関係がないわけです。
例えば女性が学内で性暴力を受けたとして、酷く傷ついた女性が学内のビルから飛び降りたとして、それに関しては大学は予見できるものではなかったという扱いになる可能性があるわけですが、これはセクシヤリティに関係なくあらゆる学生に関係することであつて、そのあたりを誤解して居ますが、このアウティング

多くの大学生に関わることで、これが今回のアウティング事件の本質的な部分かと思えます。

団体設立の経緯について

編集部 それで「LGBTQ+ Bridge Network」という団体を作り、活動して行くことになった経緯についてお聞きしたいと思います。

本田 組織体制自体が複雑なので説明に困りますが、これまで一橋大学にはアウティング事件が報道された二〇一六年から、クローズドな当事者同士のサークルは出来ましたが、学生を支援するような体制とか大学に訴えかけていくような活動とかオープンなコミュニティはなく、新しくサークルを作っていくという流れの前に大学側で新しい事業を始めるというような流れがあり、その事業が「Pride Bridge」といって二〇一九年夏くらいにできました。

そこには「good aging yells」の松中権さんや、LGBT法連合会の神谷悠一さんと研究者の川口遼さんと三名が中心となつてOB・OG団体を立ち上げました。それと同時に大学で何かできないかということで「CGASS(ジェンダー社会科学センター)」という組織の事業として「プライドフォーラム」という事業ができるんですね。このプライドフォーラムというのが、大学内で寄付講座とリソースセンターという施設を立ち上げるという事業を行い、この二

この事業がOB・OGからの寄付金で賄われるという関係でPride BridgeとCGSSの共同事業なんですけど資金関係はPride Bridgeが、事業運営はCGSSが行うといった関係性でした。

そのプライドフォーラムのリソースセンターの運営をするにあたって、学生スタッフが必要で、集められた学生が作ったのがこのLGBTIQ+ Bridge Networkという組織で、先ほど申し上げたその二つの事業でしかCGSSはやらない・やれないという制限があり、学内でのイベントとかシンポジウムや学生への広報のための新歓イベントなど、事業に含まれないことはCGSSはできないので、それなら集まった学生メンバーで色々円滑に動くためにサークルみたいな枠組みがあった方がいいということで新しくできたのがこの団体です。

このサークルが出来たのが二〇二〇年の一月です。内容としてはプライドフォーラムのリソースセンターの運営と、学内のイベント、そして学内調査を二本の柱としてやっています。

そのリソースセンターというところが何をやっているかというところ、学内のLGBT学生に対して学外の支援・学内の体制について情報提供したり、学外であればNPOのサービスであったり、自治体の電話相談や、例えば東京神奈川埼玉千葉の東京近隣のところでどのようなサービスが行われているか、LGBTコミュニティってどんなものがあるのかなど、そのようなものを一元化して資料として提供する。他にも例えばHIV無料診断の情報を提供するなど行って



注1：追悼のための動画作品
それぞれにとっての一橋アウトィング事件
2020/一橋アウトィング事件被害者追悼
特別企画
<https://www.youtube.com/watch?v=KBwT6TRqCrO&feature=youtu.be>

いかに自分ごとになったのか、受験を間近にして、学部四年生の時にある女性の方と飲みに行き、卒業した後の進路の話になり、一橋大学の大学院を受けようと思っっている事を伝えたら表情がガラッと変わり「実は今こんな事件があったって裁判をやっているんだけど、それで亡くなったのは私の兄なんだよ」という事を教えてもらったのがきっかけでした。妹さんには私の短期留学時代にお世話になっていたこともあり、一気に身近な問題になりました。

これも運命かなと思ひ、大学院に行ったら出来ることをやりますと伝え、裁判中である事も知っていたので、学内での情報も提供することにしました。妹さんはあまり僕に進学を進めず、他の大学にする事も進められましたが、僕は研

います。やっぱり一橋大学アウトィング事件を経て、セクシャリティに興味・問題意識を持つている学生が結構増えていて、寄付講座の受講生がかなり増えており、去年は登録者五〇〇人を超え、大学一の登録人数になっているぐらい人気です。そういった学生が授業のフォローアップとして、より学び深めるための入門書などもリソースセンターで貸し出しをしています。

そこにも学生スタッフが働いているわけですが、それ以外にも啓発用パンフレットをデザインして作ったりとか、今年は動画(注1)を作成したように、アウトィング事件の追悼の企画をやったりしています。

追悼のための献花台設置

編集部 以前新聞に取り上げられていましたが、献花台を設置したのはどのような経緯でしょうか

本田 献花台をやったのは僕が大学院に入学した時のことなので、二〇一九年の八月二四日の命日です。

その時にはプライドフォーラムというものができるといふ噂がある程度だったので、活動する枠組みがなく、献花台を設置した時は僕個人行いました。大学院に入った時に何かできないかなと思っって院生自治会に掛け合ったりしたんですが、人手が足りないということで断られて

しまつて、刻々と命日が近づいているなかで、本日は学内調査とかその段階でやりたかったんですが、実行できなかったもので、何ができないかと思っって献花台を命日から一週間設置しました。結構訪問してくれる人は多くてありがたかったです。

自分ごととして捉えるきっかけは

編集部 それでは、この問題に主体的に関わるようになったきっかけとして、献花台を設置する前にどのような経緯で事件を知ったのかお聞きしてよいでしょうか。

本田 もともとこのアウトィング事件を知ったのは報道があった時で、二〇一六年には他大学の学部三年生で、ちょうど学内の相談員みたいなことをアルバイトとしてやっていました。その相談員としての業務は例えばサークルに乗り遅れてちよつと学校に来たくないとか、学内のWiFiへの繋ぎ方が分からないとか、多岐にわたりますが職員に相談しにくいことを軽く雑談交じりに受けていました。

生まれも育ちも僕は国立市で、その中で公園のように使っていた一橋大学で学生が亡くなった、しかもそれがゲイの学生だということを知って、相談できる場所が無かったのかなと思ひ、当時は全然事件の経緯とか知らず、その少し後の時期にコロナでバックパッカーをしていて一橋大学の学生が、強盗に荷物を奪われて追

究とこの問題は切り分けていて、むしろそれなりの事情が分かっている人間が大学に行つたほうが色々できるのではないかと、という事で結局は頑張ってくださいと応援してもらいました。

これが一段階目の自分ごとになったタイミングです、二段階目はやはり先ほど話した二〇一九年の献花台が僕にとつては大きくて、献花台のことをすごく色んなメディアに取り上げていただいて、東京新聞やオンラインメディアのBuzz FeedやBusiness Insiderに掲載され、後者の方は遺族の方も掲載されましたが、それがヤフーニュースに取り上げられました。

そのニュースに付いた閲覧者のコメントがすごくて、例えば学歴ロンダリングであるとか、他大学から来て偉そうであるとか、そんな事は私にとつてはどうでもよかつたんですが、「ゲイ野郎黙つてろ」という書き込みがあつて、僕は「ヘテロセクシャル(異性愛者)の性自認が男性なので、典型的な男性のパターンに該当するものなんです、僕のセクシュアリティを確認もせずにゲイ野郎って言うのはちよつと看過できないなと思ひました。」

というの、「ゲイ野郎だと言つたら、お前はどうかせ傷つくだろう」という思い込みがそこにはあるからです。僕はもしかしたらトランスジェンダーかもしれないし、ヘテロセクシャルかもしれないのに、何故決めつけるのか、それが社会問題を如実に表現していると思ひました。セクシャリティは気軽に確認するようなものはありませんがそれを確認もせずに決めつけ、

しかもその真意が相手が傷つく言葉であるだろうと認識に基づいていると言うのが、初めてこういう社会でLGBTの当事者の人たちは生きているんだなと思つたんですね。そこが二段階目の自分ごとになったタイミングで、これは社会はまだまだ伸びしろがあるなと思ひました。

特にLGBTの学生は毎日がそういう環境なんです。この人にはカミングアウトしていいと思うとか、この人には駄目だとか、この人にはカミングアウトしたっけなとか、そんな情報管理で毎日頭の容量を使つていて、誰かに会つてもアウトィングに繋がるか考えたり、カミングアウトとも毎日向き合っているし、アウトィングされしたら、差別的な発言が降りかかってくるような、そういう毎日を過ごしているんだなと、全てではないものの一部体験した気がします。

そこがこの社会は変わっていくべきだし、大学というのは変えていかなければ、学生は本当の意味での自由に困らずに安心して学べる環境というのは築かれないんだなと思ひ、それが主体的に関わろうと思つた理由でした。

僕は誹謗中傷に対して耐性があつたので、興味本位でコメント欄を覗きましたが、誹謗中傷が七割くらいで、それに耐え切れず自殺してしまふ人も近年では多く報道されています。良くも悪くもメディアの影響力の強さも実感しました。(後編に続く)